

早稲田大学 第一文学部 古典 講評

〔総合分析〕

<p>出題形式 試験時間 解題</p>	<p>マーク・記述併用</p> <p>90分（現代文2問、古文1問、漢文1問）</p> <p>（三） 『堤中納言物語』 平安時代末期（院政期）から鎌倉時代初期にかけての成立。短編物語集。作者は未詳で、一〇編の物語と一つの断章からなる現存する最古の物語集。『堤中納言物語』と呼ばれる理由は不明。</p> <p>「貝あわせ」 ある家で北の方腹の姫君と継子の姫君との貝合があり、継子の姫君のために奔走する童に同情した蔵人の少将は観音の靈験を見せながら援護し、少将はその様子を垣間見る。</p> <p>（四） 瑠玉集（ちょうぎょくしゅう） 感応篇第四（『全相二十四孝詩選』「田真・田広・田慶」はその異文。</p>
-----------------------------	--

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
（三）	作者未詳『堤中納言物語』「貝合」物語	<p>問十七 〈本文補充〉 本文の元々の省略（言いさしの部分）を内容から補う設問。導入部で提示された内容、直前の「十ばかりなる男」の行動を踏まえ、引用文（発話）中の「求めえて」をヒントにすれば、正解を得られる。ちなみに類似の設問の形式は97年法学部で問われたことがある。標準。</p> <p>問十八 〈空欄補入〉 第一文学部で例年問われる形式。本年は副詞を補うものであった。4つの空欄の相互関係も考慮しつつ、呼応関係などを手掛かりとして、決めやすいものから判断するとよい。標準。</p> <p>問十九 〈傍線部解釈〉 傍線部のキーワードを捉え、文脈に照らし合わせ判断力が必要。4は「つれなく」・6は「さり」の指示内容と、ある姫君・その弟・童と東の御方との関係を把握して選択する。やや難。</p> <p>問二十 〈文法〉</p>	標準

<p>(四)</p>	<p>瑠玉集(ちょうぎよくしゅう) 感応篇第四 (『全相二十四孝詩選』「田真・田広・田慶」はその異文。</p>	<p>基本問題。「む」に関する識別の設問。傍線部 7 は推量の助動詞「む」であることの判断は容易。傍線部 1 と 9 の職能(意味)の判別が鍵。易。</p> <p>問二十一 〈和歌の修辞〉      縣詞を問う和歌の技巧に関わる基本の設問。「かひ」が「貝」と「甲斐(効・詮)」の縣詞としての典型。但しその知識がなくとも本文の内容から見抜けたはず。「かた」が「潟」と「方」は馴染がないかもしれない。標準。</p> <p>問二十二 〈内容一致〉      典型的出題形式。本文中に表面上同一の行が見えることから、選択肢ホの判断に迷ったかもしれない。ある姫君と東の御方と会話の真意を把握できたかが問われている。難。</p> <p>問二十三 〈文学史〉      第一文学部の文学史としては平易。文学史の基本的な学習をしておけば判断は容易。易。</p> <p>問二十四 〈返点〉      基本出題形式。基本となる漢文の構造・形式の知識を備え、漢字の意味を捉えれば正解を得られる。漢文に慣れ親しむことも必要。標準。</p> <p>問二十五 〈空欄補入〉      基本の句形からは崩れているものの、「抑揚」の句形である。前文の「尚」との呼応に気付けば選びやすいであろう。易。</p> <p>問二十六 〈解釈〉      選択肢が意識されたものであるのでやや難解。傍線部に含まれる「不如」の句形に着目し、傍線部の内容を把握した上で選択肢を選ばないと混乱する。「不如」を直訳した口は文脈上「深い怨み」の部分が合わない。やや難。</p> <p>問二十七 〈内容把握〉      最後の一文が結論となっていて、この部分がこの設問の解答のヒント。選択肢は本文の内容に合致しているかに見えるものを含むので、対応しない部分を含む選択肢を消去するとよい。</p>	
------------	---	---	--

## 〔総合コメント〕

(三)

分量：増。過去五年の第一文学部の出題の分量に比べ、やや多めの本文であった（なお03年は約1100字、02年は約900字）。設問数は昨年度と同じ7問、すべて客観式（選択肢を選ぶもの）。

出典：『堤中納言物語』は頻出の出典。出題の引用部分は決して有名な箇所とは言えないが、導入部（前書）が付され初見であっても内容は理解できたであろう。

形式：本文を補う設問・空欄補入・解釈・文法・和歌の技巧（縣詞）・内容一致・文学史の7問共にこれまで第一文学部の出題形式を超えるものではない。問十七の本文の省略を補う設問の形式は、ここ数年の第一文学部で出題はないが、一般的な出題形式。

(四)

分量：減少。本文の長さは凡そ130字、昨年が出題が凡そ180字に比べ、幾分短くなった。設問数は4問で同一。

出典：まれ。めずらしい出題ではあるが、例えば、御伽草子の『二十四孝』など日本文学にも反映した話。

形式：返点を付す設問・句形に関わる設問・解釈・内容把握、共に昨年とは傾向を異にするも漢文の出題としては基本形式。